

The front clinic

ザ・フロントクリニック

中島リウマチ膠原病・腎クリニック

鹿児島県鹿児島市

描いていた未来に近づけるよう 患者さんを支援するクリニック

「病気になる前に患者さんが描いていた未来に近づいていけるように支えたい」。中島リウマチ膠原病・腎クリニックの中島悟院長は、家族が膠原病を発症したのを機に医師を志した。医学部学生時代から、ぶれることなく膠原病治療の知識を蓄積し、経験を積んだ。2022年の開業後は、同院の患者さんを診療するだけでなく、離島での診療も継続。医師や看護師の勉強会に積極的に参加し、膠原病治療の底上げに力を尽くしている。

家族の発症を機に 膠原病の専門家を目指す

中島院長が10代で医師を志したころ、家族が膠原病を発症した。当時は原因が分からず、治療法も確立していない時代。担当医師から病気の説明を受けたが、どんな病気か、今後どうなるのか、どんな治療法があるのか、理解できなかった。中島院長は「本人や家族が膠原病を理解するのを支え、付き合い方や闘い方を共有できる医師になりたい」と、医学部受験前に決意し、膠原病の専門家を目指した。

中島院長の目標は、患者さんが発症前に目指していたことをあきらめず、実現できるよう支えること。例えば学生なら、大学に進学したいと考えた時、病気でなければ高校3年生の時に集中して頑張れる。けれども膠原病だといつ入院が必要になるかわからないため、ふだんからコツコツ、受験に向けた準備ができるよう治療を行う。また、子どもを望む世代なら、妊娠しづらいことや妊娠中に使えない薬があることを伝え、家族計画に役立ててもらおう。患者さん一人ひとりの目標を大切に、その目標を共有できる医療の提供を目指している。

目標設定時は、患者さんの価値観も重視する。例えば皮膚に症状が出る場合、見た目を気にする若い世代と高齢者では受け止め方が異なる。治療の強さも含めて、重視するこ



「患者さんが発症前に描いていた未来の実現を支えたい」と話す中島悟院長。



患者さんの生活や価値観を大切に治療方針を決める。

とは何かを患者さんと共有し、治療を進める。

「生活習慣などはまったく関係なく、ある日突然発症するのが膠原病です。子どもから高齢者まで、だれが発症してもおかしくありません。患者さんは自分を追い込まず、若い患者さんの親は自分のせいにはしないこと。このことを伝えられる医療をしたいと思います」と中島院長は強調する。

「大学時代から、積極的に免疫や膠原病について学び、理解したつもりでいましたが、患者さんと接することで、教えてもらうことばかりです」

クラークを活用し患者さんの 思いを引き出す

中島院長は開業にあたり、総合メディカルに相談し、継承を勧められた。同社はリウマチ科を標榜するクリニックを複数訪問し、鹿児島県でも有数のリウマチ専門医である泉原智磨氏に継承を提案。泉原氏は施設と患者さん、スタッフの引き継ぎを望んだ。中島院長は、以前から泉原氏の講演会に足を運ぶなど、尊敬していた大先輩の仕事を引き継げることを喜び、継承はスムーズに進んだ。

2022年、開業。膠原病について知ってほしいという思いを込め、クリニック名を「中島リウマチ膠原病・腎クリニック」とした。患者さんが自身の症状をインターネットで検索し、「膠原病かもしれない」と不安に思ったときに、受診しやすくなればと考えた。

「膠原病を疑い受診した結果、婦人科など別の科を紹介する人も4分の1程度います。困ったらとりあえず行ってみよう、地域で頼られるクリニックになりたいと考えているので、



受付職員も患者さんの思いを引き出す役割を持つ。



明るい雰囲気の1階受付と待合室。

他科紹介は何の問題もありません。ただし、現在は患者さんが多すぎるのが課題で工夫が必要です」と語る。

泉原氏の患者さんを引き継いだこともあり、1日の外来患者は約80～110人。これらの患者さんに対応するため、院内を改装し、医師事務作業補助者(クラーク)と放射線技師を採用した。建物の2階に診察室を5部屋設け、それぞれにクラークを配置。中島院長が各診察室に移動する方式にした。各診察室に呼ばれた患者さんは、まずはクラークと対話。クラークが、患者さんの体調や困りごとを聞き出した上で、中島院長が診察する流れだ。短い時間で医師が一方的に話をするより、患者さんが聞いてもらいたい話をするので、満足度が上がると効果を実感している。

中島院長は「クラークは新しく採用しましたが、特に教育することはないくらい優秀な人たちです。患者さんによって話すスピードを変えるなど、患者さんが話しやすい雰囲気を作ってくれています。女性の患者さんが多く、生理不順や更年期症状、陰部の炎症など、私に直接伝えづらいことも、ク



2階診察の待合室。



5つの診察室を中島院長が行き来する。



開業にあたりCTを導入した。

ワークには話してもらえます。彼女たちがいなければ、仕事にならないくらいです」と讚える。

また、放射線技師も採用し、レントゲン検査を任せた。放射線技師には、関節エコーの撮り方も習得してもらい、以前からの臨床検査技師の業務量を軽減。CTも導入し、検査の質を上げる取り組みも行っている。

患者さんは鹿児島県内や離島、熊本県、宮崎県からも訪れる。広報活動はほとんど行っていないが、口コミで受診する新患は月60人程度。中島院長は、受診を望む人を早く診察してあげたいため、月60人のペースをもっと上げたいと考えている。週1日だけでも「午後は初診限定」という日を設けたいと考えている。

「中高年で発症する人は、高血圧など別の問題も出てきます。それらの病気にもじっくり向き合う医療をしたいと思います。そのためには、一緒に診療にあたってくれる医師がいるといいなと思います。医師2人体制になれば、2倍じっくり見られるようになり、支援の幅も広がられると思います」

患者さんの生活を視野に、 学問的正解のみを求めない

中島院長は、「学問的に正解なことだけをしても患者さんはハッピーになれない」と断言する。鹿児島県は大都市圏に比べ、平均世帯年収は低く、離島はさらに低額になる。若い夫婦でも痛みのため共働きができないという人もいる。「勧められている高い薬は使えない。どうにかならないか」と、別の病院から移ってくる患者さんもいる。中島院長は、経済的余裕がなく暮らしている人に、学問的に正解だという理由だけで高額な薬剤を処方するのは疑問だと指摘する。

そこで、以前から行っていた離島での診療を開業後も継続。クリニック休診日には種子島に出向き、ふだんは病院の整形外科医がフォローしている患者さんを専門的な視点で診療する。患者さんにとっては、離島から鹿児島市内までの交通費負担が無くなり、その分を治療費に充てられる。

遠方の患者さんには、ふだんはかかりつけ医が担当し、年に1度来院してもらい、中島院長が診察することで、患者さんの身体的、経済的な負担を減らす取り組みも行っている。

製薬会社の協力を得て、整形外科医やかかりつけ医を対象に勉強会を開催。患者さんを紹介するとき、何が不安か、どんなことを知りたいかなど、ざっくばらんに意見交換する場だ。山口県や香川県の医師グループからは、腎機能が低下した際の薬剤の使用法についての勉強会開催を依頼された。他科との連携など、開業医ならではの課題について情報交換し、ネットワークの幅を広げている。

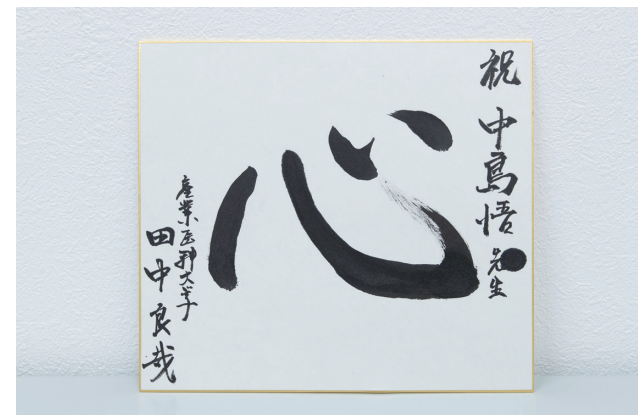
中島院長は、社会制度を十分に使いこなせていない患者さんが多いことを不安視する。身体障害者手帳や介護保険の申請など、生活を支える制度の利用を促すことも必要だという。患者さんに、「気がかりなことはメモしてきてね。次



患者さんの生活や価値観を支えるスタッフ。

の受診までに、これだけは話そうということを考えておいてね」とうながすことを欠かさない。

「患者さんには楽しい老後を送ってほしいと願っています。働きたいだけ働き、精一杯子育てをし、自分の時間を持てるようになったときに、旅行に行くなど、みんなと同じことができるような診療をしたいと思っています。その頃には高血圧などのほかの疾患も出てくると思いますが、そういったことにもじっくり向き合っていきたいと考えています」と話す。



恩師から贈られた「心」の色紙。

clinic data



中島リウマチ膠原病・腎クリニック

〒890-0067

鹿児島県鹿児島市真砂本町26-3

TEL099-206-7126

<https://nakashima-rheumatism.com/>

■診療科目:リウマチ科、膠原病内科、腎臓内科、内科、呼吸器内科(完全予約制)

■病床数:無し